

⑤中央中学校区の施設一体型の小・中一貫教育に比べて、東部中学校区、西浜中学校区の併設型小・中一貫教育は、効果が望めるのか？

小学校1年生から中学校3年生まで、あわせて9学年の児童が同じ校舎で学ぶのが小中一貫校です。もちろん、ただ同じ校舎にいただけでなく、給食や掃除の時間に、中学生が小学生の面倒を見たり、小・中を通して共通の教科を学んだり、5〜7年生が一緒に授業を受けたり、職員室を小・中一緒にして協力するなど、今までにない特色を出せます。併設型の場合、小・中を渡り廊下でつなぐ改修など、学校現場と協議しながら進めていきますが、大切なのは教育の中身です。

⑥小・中一貫教育のメリットや、デメリットは？

現在小・中一貫教育を実施している先進事例の学校で評価されているメリットは、「指導体制の充実」、「施設整備の有効活用」、「学校運営の一貫性」、「小中の教育課程の連続性」、「教育指導の連続性」、「地域との連携強化」などです。また、デメリットとしては、「小と中の区切りがなくなるのでケジメが付けにくい」、「転入転出時の戸惑い」、「教育計画

(カリキュラム)の複雑化」、「学校行事の持ち方に工夫が必要」、「子どもが在校時間が長くなることもある」などが挙げられているようです。多久市ではこのように予想されるデメリットを克服する取り組みを行います。

⑦小・中一貫教育は、3中学校区で一斉に行うのか？反対があれば、その地区は小・中一貫にしないということもありうるのか？

現在の「3中学校、7小学校体制」が、3つの小中一貫校に統合再編され、一貫教育を行うようになることで、「多久市の新たな学校が生まれる」と捉えているので、段階的な統合再編は考えていません。3中学校区が同時に開校することが望ましいと考えます。

⑧小学校の先生と中学校の先生との垣根はとれるのか？

「6・3制」から「4・3・2制」という新たな教育システムにスムーズに移行することが大切です。これは発達状況に合わせ、継続性のある教育ができるようになるシステムです。これまでの小学校と中学校が別々の制度では、それぞれの子ども達の個性を伸ばすにしても継続

的に配慮することが難しかった面もあります。校舎を一体化し、職員室も一つにすることで、小・中学校間の教員間での連絡・調整が向上し、継続した指導ができるようになります。期待できます。また、それぞれの教科の系統性を意識した授業で、1学年毎に次の学年につないでいくことができるようになり、特に小学校と中学校のつなぎを大切にできます。

⑨小学生が中学生にいじめられないか心配だ

少子化が進む中で、異年齢の子ども達同士の交流の機会をつくることが不可欠です。年齢の離れた子ども同士のかかわりを計画的につくる必要があります。小学生と中学生のかかわりを作ることで、自分より歳の少ない子の世話をしながら相手を好きになったり、優しい人格を養ってほしいと考えます。

学校の統廃合について

①学校がなくなると地域がますます衰退するのではないか？

「子どもの教育か、地域の存続か」で二者択一すべき問題ではないと思います。これは、地域が活性化して学校も統廃合せず、その地域で

存続するという両方が並び立つ地域振興策の問題であるといえます。総合的な地域振興策での意見交換会なども必要だと考えています。

②閉校になった後の校舎の活用はどのように考えているか？

地域の活性化につながる活用方法の検討が必要で、地域の皆さんも参加していただく委員会を立ち上げて検討したいと考えています。また、各学校の体育館は、災害発生時の避難所にもなりますので、その点も考慮し検討いたします。

③地域とのつながりが減ってしまうのが心配だ

これまでは小学校区毎にまとまってきましたが、これからは、少しエリア意識を広げて、中学校区を基本に、小中一貫の学校で「1つの学校・1つの地域」として、学校と地域社会の関係を考えることが大切だと思います。そして、地域の皆さんにも学校運営に加わってもらい、学校からも積極的に働きかけ、ネットワークをつくり、その中心に子どもたちや学校を位置づけるといって、学校が地域コミュニティーで中核の役割も持つことが重要です。そのためにも、中学校区ごとに各